

令和 4 年 6 月 27 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2021

課題番号：19K20544

研究課題名（和文）民主化期インドネシアの地方王権ネットワークに関する人類学的研究

研究課題名（英文）Anthropological Research on Local Kingship Networks in Democratic Indonesia

研究代表者

西島 薫（Nishijima, Kaoru）

京都大学・スーパーグローバルコース人文社会科学系ユニット・特定助教

研究者番号：30838793

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究課題の目的は、インドネシア・カリマンタンのダヤック人たちの王権を事例に、王の人格的資質や王と人々の属人的な関係が、地方政治においてどのように機能しているか、そして王権の側から見た民主化・分権化期の地方政治の動態を明らかにすることである。本研究では、1). 慣習的権威や王権に関する文献調査、2). 2019年度のインドネシア・西カリマンタン州での現地調査、3). インターネットの記事、SNSを用いた調査を実施した。これらの研究活動の成果を、投稿論文2本と学会や研究会での口頭発表5回で発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題の成果の意義としては、1). ダヤック人たちの王権復興において、人々の神器への奉仕と、人々の王への忠誠という異なる性質の紐帯が併存していること、2). 「王国」の復興は、ダヤック人たちの先住民としての「主権」の具体的な表現手段であること、3). ダヤック人たちが、王への忠誠を表現することで、「王国」を復興させ先住民としての主権を主張していることを明らかにした点である。本研究課題の成果は、人々の「主権」の具体的な表現手段としての「王国」の復興という観点を提示したことで、インドネシアを含む東南アジア地域の慣習的権威者の復興に関する比較研究に向けて、新たな展望を開くことが出来たことである。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to explore how the personal qualities of the kings and the personal relationships between the king and the people have functioned in the local politics and how the local people have experienced democratization and decentraliation, especially focusing on the case of the kingship of the Dayak people of Kalimantan, Indonesia. In this study, I have conducted 1). literature survey on customary authorities and kingships, 2). Fieldworks in West Kalimantan, Indonesia in 2019 and 2020, and 3). analysis on the internet article and SNS. I published two papers and made five oral presentations at conferences and workshops.

研究分野：地域研究

キーワード：ダヤック 先住民 王権

1. 研究開始当初の背景

インドネシアでは、スハルト政権下の開発独裁体制の崩壊とともに、民主化・分権化の時代を迎えた。民主化・分権化期のインドネシアの地方各地では、王たちが復興している。現在インドネシアでは 100 を超える王たちが活動をしている。これら復興を果たしている王たちの多くは、地方社会の名士や地方政治エリートとして活動を展開している。しかし、民主化・分権化期のインドネシアで復興する王たちに関しては、これまで十分な研究がおこなわれてきたとは言い難い。本研究課題の対象である西カリマンタン州においても、カリマンタンの先住民であるダヤック人たちの王が台頭を果たしている。本研究課題では、ダヤック人の王権であるウルアイ王権を事例として、王と王の「復興」を支持する人々の属人的な紐帯に焦点を当て、民主化・分権化期のインドネシア地方政治に、王を取り巻く属人的な関係がどのように接続し機能しているのかを明らかにする。本研究課題で設定した問題点を解決することで、人々が王権を媒介として、どのようにインドネシアの民主化・分権化を経験しているかを明らかにすることができる。

2. 研究の目的

上記のような状況を背景として、本研究課題では、研究代表者のこれまでの研究活動で解明出来なかった、王権における神器の中心性、王の人格的な資質や王と神器の信奉者の日常的かつ属人的な紐帯、そして神器の信奉者たちから見た民主化・分権化の経験の質的記述の 3 つの課題に取り組み、民主化・分権化と王の台頭という逆説的な状況が生起している要因を明らかにすることを目的とした。具体的には、本研究課題では、神器がウルアイ王権の中核的要素であること、そして、「親切(な王だった)」など、神器と人々の媒介者としての歴代の王たちの人格的資質、王と人々との日常的かつ属人的な紐帯に焦点を当て、現代の王権の動態を明らかにすることを目的とした。加えて、本研究課題では、王と追従者たちの属人的な関係の具体的な記述から、地方政治を逆照射することで、王権を構成する属人的な関係がどのように地方政治と結びつき機能しているのか、そして、王権を媒介として、人々がどのように民主化・分権化を経験しているのかを明らかにすることを目的とした。王と人々の属人的な紐帯の内容を具体的に記述することで、民主化・分権化期のインドネシア地方政治の動態を、王権を構成する人々の側から捉えることが可能になる。

3. 研究の方法

研究開始当初は、(1)他地域の慣習的権威者に関する先行研究や先住民運動に関する先行研究を用いた比較研究、および(2)西カリマンタン州でのフィールドワークの参与観察とインタビュー調査を主な調査方法とすることを予定していた。(1)に関しては、東南アジア地域、オセアニア地域そしてアフリカ地域の慣習的権威者と国家の関係に関する先行研究、先住民運動や慣習的土地権に関する資料や先行研究、そして王権に関する文化人類学を中心とした先行研究を渉猟した。ただし、2020 年 3 月末より本格化した新型コロナウイルス拡大の影響により、国外でのフィールドワークを断念せざるを得なくなった。他方で、近年では SNS やインターネット新聞記事を通じて調査地の動向の一部を知ることができる。そこで、(3)調査地に関するオンライン上のニュース記事、動画投稿サイト、SNS などの分析に基づいた調査を実施した。また、新型コロナウイルス拡大による調査遅延のため、調査期間を 2021 年度まで延長した。2020 年度と 2021 年度は、文献調査の範囲を拡大させると同時に、電話インタビューやオンライン上での調査を継続した。

4. 研究成果

本研究課題で得られた研究成果は、研究論文(6)と(7)において発表した。王と人々の属人的な紐帯に関しては、2019 年度までのフィールドワークにおけるインタビュー調査によってアプローチした。先述した新型コロナウイルス拡大の影響もあり、短期間の現地滞在でのインタビュー調査では、十分な情報を収集することが困難だったものの、複数のインフォーマントに対して、インタビュー調査を実施することができた。インタビュー調査では、歴代の王と慣習長の日常的な交流に関するデータと、王と追従者たちとの人的紐帯に関するデータを得ることが出来た。データ不足であることは否めないものの、既に得ていたデータと、インタビュー調査で新しく得られた結果を用いて、2021 年度に研究論文(6)を出版した。研究論文(6)では、神器と人々の媒介者としてのウルアイ王が、各地のダヤック人集落に儀礼柱を建立した経緯や、王と人々の日常的な交流に関する語りから、インドネシア独立期から民主化・分権化期までのウルアイ王権の動態と王と地方政治エリートの相互依存的な関係について明らかにした。また、研究成果(6)では、王と人々の属人的な関係に関して、断片的ではあるものの、明らかにすることが出来た。しかし、歴代の王の人格的要素と王と人々の属人的な紐帯を主軸として、王権の動態を描き出すという点では課題が残った。

2020 年度以降も研究調査を継続する中で、神器を中核として人々が参集する局面と、王を中核として人々が参集する局面とでは、ウルアイ王権が異なるタイプの政体として顕在化してい

るのではないかという、新しい仮説を立てた。この新たな仮説に基づいて慣習的土地権の問題や地方選挙に関するインターネット記事や動画投稿サイトの分析、そして電話インタビューを実施した。また、先住民運動や先住民主権に関する先行研究にも、文献調査の対象を広げた。これらの研究成果を研究論文(7)として出版した。本研究課題での最も重要な成果は、研究論文(7)で議論した内容である。研究論文(7)では、ウルアイ王権が実質的に二つのタイプの政体の両極の間を振幅しながら、儀礼的文脈において顕在化していること、この政体の振幅の背景的要因は、1990年代以降にインドネシアに輸入された国際的な先住民運動と先住民主権(indigenous sovereignty)の概念であること、そして、ダヤック人たちは「王国」を「節合(articulation)」することで地方政治の中で、ダヤック「民族」としての先住民主権を主張していることを指摘した。

第一に、ウルアイ王権は、神器を中核とした神器奉戴共同体と、王自身の神聖性を中核としたマレー人たちの伝統的な政体である「王国(kerajaan)」の両極の間を振幅していることを指摘した。ダヤック人たちの日常的な実践や儀礼を分析する限り、ウルアイ王権は、神器を中核とする神器奉戴共同体であることが指摘できる。この神器奉戴共同体は、ウルアイ王の主催する神器祭祀において顕在化する。神器祭祀では、王や神器の信奉者たちは、儀礼を構成する数々の規則を遂行することのみ、神器に対して加護を祈ることができる。現地の言語(クリオ語)では、神器祭祀で定められた規則を遂行する所作には、「労働」と同じ単語が用いられる。つまり、ダヤック人たちは神器祭祀で、神器に対して「労働」を奉仕することで、神器からの加護を受けることができる。研究論文(7)では、神器奉戴共同体は、神器の信奉者たちによる神器への奉仕を軸として成立していることを指摘した。他方、民主化・分権化期に地方各地で「王」たちの復興が相次ぐ中、ダヤック人たちの間ではみずからの「王国」が存在したのではないかという期待が高まった。ダヤック人たちの「王国」がじっさいに存在したことを示す史料は発見されていないものの、ダヤック人たちは、儀礼的文脈において、あたかも「王国」が存在するかのようには振る舞っている。「王国」の記憶を持たないダヤック人たちは、「王国」を隣接するマレー人たちの王国を参照し、「王国」を顕在化させている。マレー人の王権に関する先行研究では、マレー人の王国は、王自身の神聖性と追従者の王への忠誠を構成要素としていることが指摘されてきた cf. Milner 1982。ダヤック人たちは、マレー人たちの王国の諸要素を取り込むことで、みずからの「王国」を創造している。そのため、ウルアイ王権が「王国」として顕在化される文脈では、ダヤック人たちは王への忠誠を示すように振る舞う。研究論文(7)では、ウルアイ王権は、神器への奉仕を軸とした神器奉戴共同体、あるいは王の神聖性と王への忠誠を軸とした「王国」として顕在化されることを明らかにした。

第二に、研究論文(7)では、ダヤック人たちがみずからの「王国」を顕在化させている背景な要因は、民主化・分権化期に興隆した先住民運動と先住民主権であることを指摘した。ダヤック人たちが「王国」の存在を仮定して振る舞うのは、他民族との間に慣習的土地権の問題が生じた時や、地方選挙において他民族と政治的主導権をめぐる競争する時である。これらの事例では、ダヤック人たちは、みずからの「王国」を顕在化させることで、先住民としての慣習的土地権を主張し、地方選挙におけるダヤック人政治エリートへの支持を表明する。これらに共通しているのは、ダヤック人たちが先住民主権を主張している点である。インドネシアでは、スハルト体制崩壊直前の1990年代に、先住民運動や先住民主権が輸入された。スハルト体制崩壊直前、インドネシア地方各地のNGOの活動が活発化した。西カリマンタン州のダヤック人たちのNGOも、先住民運動に関する国際会議への参加を通じて、先住民主権など先住民運動で用いられる諸概念をインドネシアに輸入してきた。西カリマンタン州のダヤック人たちは100を超えるサブ・グループに分かれており、ダヤック人たちは「民族」として統合されていたわけではなかった。そのような状況下で、かつてダヤック人が「王国」を持っていたという仮定は、ダヤック人を「民族」として統合し、ダヤック「民族」としての先住民主権を主張する枠組を提供した。研究論文(7)では、ダヤック人たちは、みずからの「王国」の存在を仮定し王への忠誠を示すことで、先住民主権を表現していることを指摘した。

第三に、研究論文(7)では、ダヤック人たちが先住民主権を主張するために顕在化させる「王国」は「仮定的」王国('as-if' kingdom)であり、ダヤック人たちは「仮定的」王国を「節合」していることを指摘した。「仮定的」国家('as-if' state)とは、E.リーチが『高地ビルマの政治体系』の中で、複数の山地民の民族グループが、あたかも国家があるかのように合同で儀礼を実施した事例を分析するために用いた概念である。「節合」とは異なる出自を持つ様々な要素を組み合わることである。民主化・分権化期のダヤック人たちの「王国」も、ダヤック人たちが「王国」の存在を仮定して振る舞うことで顕在化しているという点で、「仮定的」王国であると言える。ダヤック人たちは、国家の主権から独立した政治的単位としての「王国」の存在を主張することは出来ない。そのため、ダヤック人たちは儀礼的文脈において、王の服装、王への忠誠を示す所作、権力の象徴としての傘、王に付き従う従者など、マレー人王国を構成する諸要素を取り込み、「仮定的」王国を「節合」することで、国家の主権と衝突することなく、みずからの「王国」の復興を模索してきた。他方、儀礼的文脈以外では、「仮定的」王国は「脱-節合(disarticulation)」される。毎年開催される神器祭祀では、ウルアイ王権は神器を中核とした神器奉戴共同体として顕在化される。「節合」と「脱-節合」により、ダヤック人たちは、マレー人王国の不平等性や階層性を内在化させることなく、みずからの「王国」を復興させてきた。研究論文(7)を通じて、民主化・分権化期が進展する地方政治の中で、ダヤック人たちは「民族」とし

ての慣習的土地権を主張し地方政治の主導権を模索してきたこと、そして、ダヤック人たちは王の下に集結し王への忠誠を表現することで、「王国」を顕在化させ、みずからの先住民主権を主張していることを明らかにした。

本研究課題では、2020年度以降は現地での参与観察やインタビュー調査を実施できなかったため、歴代の王たち個々の人格的特性と、王と人々が構築してきた属人的な紐帯に関しては十分なデータを収集することが困難だった。ただし、本研究課題では、民主化・分権化期の王権復興において、神器への奉仕と王への忠誠という異なる性質の紐帯が交錯していることが明らかになった。今後の研究においても、人々の間で神器への奉仕や王への忠誠が具体的にどのように語られ、王と人々の関係が構築されているのかを探求する。とくに、本研究課題における特筆すべき成果は、ダヤック人王権が、人々の神器への奉仕によって規定される神器奉戴共同体と、王への忠誠によって規定される「王国」という2つのタイプの政体の両極を振幅していること、ダヤック人たちが「仮定的」王国を「節合」することで、地方社会において先住民主権を主張していることを明らかにした点である。また、ダヤック人たちの「王国」の「節合」による先住民主権の主張は、ダヤック人たちの民主化・分権化期の地方政治への参画の手段であると指摘できる。本研究課題で得られた、民主化・分権化期の地方政治の中で、人々が先住民主権を主張する枠組としての「仮定的」王国を「節合」しているという説明枠組は、インドネシア各地で現在も継続している王たちの復興現象を解明するためにも有効である。本研究課題の成果によって、民主化・分権化期のインドネシアの王たちの復興に関する比較研究の展望を開くことができた。今後は、民主化・分権化期の王権に関する共同研究を実施して、比較の観点からも、民主化・分権化と王権復興の実体を解明していきたい。

参考文献

- リーチ, E. 1995. 『高地ビルマの政治体系』 関本照夫訳, 弘文堂.
Milner, A. C. 1982. *Kerajaan: Malay political culture on the eve of colonial rule*, Tucson: University of Arizona Press.

研究成果

口頭発表

- (1)西島薫. 2019. 「神聖王のポリティクス：西部カリマンタンのダヤック人王権の事例から」『第53回日本文化人類学会大会 53回研究大会』(2019年6月1日東北大学)
- (2)西島薫. 2019. 「ダヤック人エリートの形成過程 - 西カリマンタン州・クタパン県の事例から」『第50回日本インドネシア学会大会』(2019年11月9日大阪大学)
- (3)西島薫. 2020. 「西部カリマンタンにおける地方政治と神器奉戴共同体のもつれあい」『日本文化人類学会第54回研究大会』(2020年5月30日オンライン)
- (4)西島薫. 2020. 「カリマンタンの「無力」な祭司王に関する一考察」『第51回日本インドネシア学会大会』(2020年11月7日オンライン)
- (5)西島薫. 2021. 「民主化期インドネシアの「王国」復興と「主権」の交渉 - 南西カリマンタンのダヤック人の事例から」『インドネシア研究懇話会 第3回研究大会』(2021年12月19日オンライン)

研究論文

- (6)西島薫. 2021. 『ダヤック人祭司王「復活」の歴史的経緯』『アジア・アフリカ地域研究』21-1, 36-66.
- (7) K. Nishijima. 2022. THE DAYAK 'KINGDOM' AND INDIGENOUS SOVEREIGNTY IN KETAPANG REGENCY, WEST KALIMANTAN. *Journal of the Anthropological Society of Oxford-Online*, 8-2, 103-129.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Kaoru Nishijima	4. 巻 13-2
2. 論文標題 THE DAYAK 'KINGDOM' AND INDIGENOUS SOVEREIGNTY IN KETAPANG REGENCY, WEST KALIMANTAN	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of the Anthropological Society of Oxford-Online	6. 最初と最後の頁 103-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 西島 薫	4. 巻 21
2. 論文標題 ダヤック人祭司王「復活」の歴史的経緯 南西カリマンタンにおけるウルアイ王の事例にもとづいた考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 アジア・アフリカ地域研究	6. 最初と最後の頁 36～66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14956/asafas.21.36	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 西島薫
2. 発表標題 民主化期インドネシアの「王国」復興と「主権」の交渉 - 南西カリマンタンのダヤック人の事例から
3. 学会等名 インドネシア研究懇話会 第3回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 西島薫
2. 発表標題 西部カリマンタンにおける地方政治と神器奉戴共同体のもつれあい
3. 学会等名 日本文化人類学会第54回研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 西島薫
2. 発表標題 カリマンタンの「無力」な祭司王に関する一考察
3. 学会等名 第51回日本インドネシア学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 西島薫
2. 発表標題 神聖王のポリティクス：西部カリマンタンのダヤック人王権の事例から
3. 学会等名 日本文化人類学会第53回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西島薫
2. 発表標題 ダヤック人エリート形成過程：西カリマンタン州・クタパン県の事例から
3. 学会等名 第50回日本インドネシア学会大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------